

随 想

アンコール遺跡とベトナム・ハロン湾の旅

佐々木 教祐

今年4月、数々の奇岩が海から突き出ており「海の桂林」とも呼ばれるベトナムの景勝地ハロン湾と9～13世紀にカンボジアで栄えたクメール王朝が築いたアンコール・ワットを主とする巨大な石の寺院遺跡を訪ねた。アンコール遺跡には4年前にも訪ねたことがあるが、アンコール・ワットの第1回廊は一辺の長さが200mもあり、壁面いっぱい「ラーマーヤナ」や「マハーバーラタ」などの叙事詩やアンコール王朝の歴史絵巻が石に浮彫されている。その他にもバイヨン寺院などたくさんの遺跡があり、クメール文化の素晴らしさを体感できる場所である。

中部国際空港からベトナム航空で5時間30分、ハノイに着く。空港を出ると一面青々とした稲の美しい田圃が広がる中をバスでハロン湾に向かう。現地ガイドさんの話では以前は韓国企業が多かったが最近では日本の工場が増えてきたとのことである。車窓に見えるベトナムの民家は間口が狭く奥行が間口の3～5倍あり、3階建が多い。これがベトナムのふつうの住宅様式とのことである。自動車は少なくバイクに大人の3人乗りや大人の間に子供を乗せて走る姿がよく見られた。200kmを3時間30分ほどで走りハロン湾沿いのホテルに着いた。ベトナムに3日間いたが毎日かすんだ曇りの天気でも最高28℃までで日本の梅雨のような気候だがカラッとしておりむしろ暑くは感じなかった。

2日目はハロン湾を見下ろすホテルの14階のレストランで朝食をとったが、海に浮かぶ島や船が霞んではっきりと見えないのが残念であった。食後近くの船着き場から観光船に乗って島めぐりに行く。最初に着いた石灰岩の島で鍾乳洞を見学した後、船の中で食事をしながら2時間30分の島めぐりを楽しんだ。船から眺める岩は天下の名勝地として知られている桂林の川下りで見られた岩山にそっくりでその姿かたちも美しかった。船で見ているとたくさんの島があるように思えたが、持参したGPSの記録を後からグーグルの地図に重ね合わせてみると、入り江の多い大きな島と3つほどの小さな島の周りを船で回ってきたことが分かった。船着き場に戻りバスでハノイに向かう。海岸には所々に日本にも輸出されているエビの養殖場の跡があった。ガイドさんによると、この

ハロン湾では良質の無煙炭が年間数百万トン積み出されており、一番重要な産業となっているという。バスで立ち寄ったハノイ近くのバチャン村は陶器で有名な所で、かつて日本では安南焼といわれ、茶人たちに好んで使われていた。ここで見学した陶器の作り方は、液体状の粘土を型に流し込み成形し、その後女性たちが筆で絵付けをし、釉薬をかけて焼き上げていた。ハノイの町で夕食後、ベトナムを代表する伝統芸能、水上人形劇を鑑賞した。劇場内に水を張った舞台があり、太鼓などの伝統楽器の生演奏に合わせて体長40cmほどの人形たちが水上をコミカルに動きまわり、庶民生活をユーモラスに演じるものが多く1時間があっという間に過ぎた。

3日目はハノイ市内観光として、ホーチミン廟の外側を見た後、1049年に建てられたハノイの古刹で一本の柱の上に仏堂が乗っている一柱寺を見学し、その後、ベトナム航空でアンコール・ワットのあるカンボジアのシェムリアップまで約1時間55分飛んだ。

4日目はバスで遺跡の見学に行った。まずチェックポイントでアンコール遺跡へ入場するための「アンコール・パス」を購入する。パスの中に印刷する顔写真を撮るため列にならぶが、係員がカメラを動かして一人30秒ほどで写真を撮ってくれる。3日間有効のパスで40ドル、見学の時はいつもこのパスを首からぶら下げていなければならない。遺跡周辺は意外と多くのトイレがあり、無料で利用するにもこのパスの提示が必要である。まずは「東洋のモナリザ」と称されるデヴァダー（女神）像で有名なバンテアイ・スレイ遺跡に向かう。ここは大規模な修復工事が行われていた。次は長い間密林の中に忘れ去られていた寺院タ・プロムを見学する。ここも大規模な改修工事がおこなわれていた。小鳥たちが落としたりしたガジュマルの実が成長し、石積みの間に根を張りこの寺院を崩壊させつつあるが、この根によってしっかりと固定され崩壊から守られている建物もある。自然の驚異のすさまじさを感じさせる遺跡でもある。昼寝をとってからアンコール・ワットの見学に行く。この寺院だけは西向きに建てられており、午前中は逆光になって良い写真が撮れないので、見学は午後の方が良いとのことである。非常に急な階段の上にある第3回廊は現在日本の協力で修復中なので見せてもらえなかった。第一回廊のレリーフ乳海攪拌も半分は修復中なので、レリーフを楽しみにして見学に行くと物足りなさを感じる。2時間ほど見学して、夕日鑑賞にプレループ遺跡に行く。西の空は雲があり、きれいな日没は見られなかった。夕食の後、宮廷舞踊アプサラダンスを1時間ほど鑑賞した。今のカンボジアは乾期で30～36℃と暑い日が続いていた。

ここアンコール遺跡の発掘と修復は上智大学の石澤良昭教授が長年手がけら

れており著作も多い。しかしアンコールを中心に栄えたクメール王朝の歴史は資料が少なくまだ明らかになっていない。資料としては石に刻まれた碑文が見つかる程度である。中国の隋書(636年完成)巻82に真臘伝があり、真臘(カンボジアの中国式呼称)国の名前が初めて登場する。それによると1世紀頃カンボジア南部に貿易で栄える「扶南」という国が出来たらしい。そして中国の呉から使節が訪れていたようだ。扶南から真臘が独立し、600年ころ力をつけた真臘が扶南を併合した。611年イーシャナヴァルマン1世の碑文(最古の年号入りクメール語碑文)が見つかっている。8世紀後半にジャワ方面でとらわれの身であったジャヤヴァルマン2世がトンレサップ湖岸西部に帰還し、802年即位しアンコール王朝が始まった。アンコール・ワットは12世紀前半にスールヤヴァルマン2世によって完成されたヒンドゥー教寺院で、当時は王の墳墓寺院として建てられ、中央祠堂には王が守護神であるヴィシュヌ神と合体した神像が祀られていたという。寺院は中央祠堂を中心に、その周囲を三重の回廊が取り巻く構成で、内側に向かうに従って回廊は徐々に高くなっている。第3回廊の中心にはさらに高い中央祠堂が祀られており、ここはヒンドゥー教で世界の中心と考えている須弥山の頂点となる場所で、王と神が一体となって密儀を行った神聖な場所なのである。アンコールでは王と神が一体になることで王権が認められた。そのため代々の王はたくさんの寺院を造ることになったと考えられる。また大量の雨が降る雨季の水を蓄え、雨のない乾期にも稲作ができるように大規模なため池の造成も国力の維持に必要で、灌漑用の東西バライなど巨大な池が残っている。

5日目は朝早く起きアンコール・ワットの日の出を見に行く。日の出は6時15分頃だが雲が掛ってスッキリとしない。朝食を食べてからアンコール・トム(意味は大きな町)を見学に行く。アンコール・トムは12世紀末から13世紀初頭にかけて造営された新都城で、一辺3キロ、周囲12キロ、幅100メートルの環濠に囲まれ、城壁の東西南北に5か所の城門がある。城壁内には、十字に主要道路が配置され、その中央にバイヨン寺院がある。そこから少し北上した位置に王宮があり、王宮の正式な塔門は、象のテラス、ライ王のテラスと一体化して造られている。象のテラスはジャヤヴァルマン7世によるもので、バプーオン遺跡からライ王のテラスまで300m以上もある壮大な規模である。見学の後、電気カートでバスの位置まで戻る。以前来た時はバスでアンコール・トムの中まで入ることができたが、塔門の幅がバスの幅ぎりぎりなので、遺跡が壊されないようにカートにのりかえる方式に変更したようだ。昼食後、昼寝をとりバスで新しく建てられた国立博物館を見学に行く。この博物館には発掘

された仏像などが並べてあったがまだ整理するまでには至っていないようである。

1177年、アンコール朝は勢力を伸ばしてきたベトナム南中部にあった海洋貿易王国チャンパの軍に王都アンコールを一時占拠されるが、その後すぐにアンコールは回復し、1181年頃にはジャヤヴァルマン7世が登場する。ジャヤヴァルマン7世の統治下では、空前の繁栄を極め、インドシナ半島の大部分に勢力を広げるほどの大王朝になった。王は道路網を整備して街道に121カ所の宿泊所を置き、国内120カ所に病院を建てたといわれている。この時がアンコール王朝の最盛期で、13世紀の初めジャヤヴァルマン7世はアンコール・トムを完成した。その後徐々に王朝は衰退していくが、アンコール王朝についての資料が少ない中で、1296年元朝使節に随行してアンコールを訪れた周達観が1年間滞在したとき見聞きしたことを書き綴った「真臘風土記」が残っており、アンコール・トムについて「真臘風土記」東洋文庫の和田久徳訳によると「国(アンコール・トム)の中央に当たって、金塔一座(バイヨン)があり、かたわらに石塔が二十余座、石の部屋が百余室ある。東側に金橋一所があり、金獅子二体が橋の左右にならび、金仏八体が石の部屋の下にならんでいる。金塔の北、一里ばかりで、銅塔一座(パプーオン)がある。」当時のアンコール・トムは金色に輝いていたことが分かる。

アンコール・ワットには、そこを訪れた日本人の墨書跡が確認でき、その中でもよく知られているのは、「肥州の住人藤原朝臣森本右近大夫一房」のもので、はるばる数千里の海上を渡り、1632年正月にこの寺院に到着し仏像4体を奉納した旨を記している。その父義太夫は加藤清正家の重臣で朝鮮の役で武勇をさせた人物で、この時代の日本は朱印状が江戸幕府から下付され、海外との往来が盛んで東南アジア各地に日本人町がつくられていた。当時はアンコール朝の末裔のチェイ・チェッタ2世がプノンペンから北へ約40キロのところをウドン王都を造営していた。17世紀にここを訪れた日本人はこの寺院を「祇園精舎」と思い込んでいたようで、長崎の通辞島野兼了が「祇園精舎の図」として持ち帰ったとされ、水戸の彰考館に現存している図がまさしくアンコール・ワットの図である。

シェムリアップ空港を19時45分に出て、ハノイ経由で中部国際空港に早朝6時30分に降り着いた。

(名古屋大学名誉教授)